
まだ名前のない物語

しん/

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

まだ名前のない物語

【Zマーク】

Z2203BA

【作者名】

しん／

【あらすじ】

この物語は、平凡な男子高校生である俺の私的な理由に基づいて書かれたものである。俺の身の回りで起きたこと、そしてそのとき俺が思ったことを文字にしたに過ぎない。だけどこれだけはわかってほしい。「あいつら、ホントはすぐえいいヤツなんだ」って……。

登場人物紹介

* この『登場人物紹介』は、隨時更新されるものとする。

俺（れい）

- > 主人公兼作者（　）。
- > 16歳。高一。
- > 甘い物好き。
- > 中肉中背。
- > あることをきっかけにひい・ふう・みいと出会った。

ひい

- > ハイ・タイ（　）。
- > 同い年。高一。
- > 可燃物。火気厳禁。
- > 超スレンダー。
- > ふう・みいとは長い付き合いで、姉妹のような関係。

ふう

- > 二重人格（　）。
- > 二つ下。中一。
- > サングラスをかけるとスイッチが入る。
- > （ある一部をひい・みいと比べると）すごく、おつきいです。
- > ひい・みいとは長い付き合いで、姉妹のような関係。

みい

- > アニヲタ（　）。
- > 三つ下。中一。

- >みんなの妹的な存在。
- >ちっこい。小学生かってくらいしつこ可愛い。
- >ひい・ふうとは長い付き合いで、姉妹のような関係。

第〇話ーーーIII

この物語はフィクションであり、実在する人物・団体とは一切関係

「『ありません』つと。…………ン、こんなモンか」
やつとのことで一段落した執筆作業。
身体を反らせて伸びをするとともに、チラと視線を壁に掛けられた時計に向ける。

1時間だ。秒に換算すると3600秒間、俺は言葉を紡いでは解す作業を繰り返していたことになるのか…………。

自らの熱の入りつぶりに呆れつつ、残っていた現アイスココア（元ホットココア）を一口。

俺が通うは私立佐久良学園。さくら立地も偏差値も特徴の少ない、一般的な中高一貫校だ。

その敷地内でも秘境に等しい第3カウンセリングルームに、いま俺はいる。

『第3カウンセリングルーム』といつのも名前だけで、少し前までは倉庫として活躍していたこの部屋。
ところが、なんということでしょう。匠の手によって整備された部屋は以下略。

ともあれ、この静かな部屋でのんびりと過ごしたり、執筆したり、あんなことやーんなことをしたりするのが俺の日課になっている。

え？ 「もつと具体的に」？

……。

..... フツ、夕口が眩しいぜ。

とまあ、これだけ聞くと『デキる作家』と考えられないこともない。そりゃうだろ？ そりゃうじやなくともそりゃうなんだ。

だが、実際は『長時間に渡つてケータイとにらめっこしてゐる冴えない男子高校生』でしかない。そこらへんについては追い追い話すとじよづ。

つまるところ、俺つてのは

「 残念ね」

「ああ、残念なヤツなんだよな」

確認のため言つておくが、いまのはきっと天の声的なものだ。
もうひとりのボクとかエア友達とか、俺はそっちのほうの『残念』
じゃない、決して。

そういう自己紹介がまだだつたな。んじゃこの場を借りるか。

『れい』。

ほりそこ、会釈すな。

コレ号令とかじゃないから。俺のあだ名だから。みんなそう呼ぶ
んだつてマジで。

オホン。お前のことはさておき、俺のスリーサイズはとこうとした
な.....。

「ちょ、ちょっと！ ちょっとちょっと！ ..」

「わあつたわあつた。あとでひいにも俺のスリーサイズ教えてやる
から

「いやいやいや。あんたなに言つてんの？ そんなことよつあたし
が言いたいのは」

「あーはいはい、ワロスワロス

「れい、あんた人の話聞く気ないでしょ！？ セツガだつてあたしの第一声を天の声的なものとしてスルーしたわよね！？」

「つるせえな。お前は知らないと思うけどな、世の中には『ガムテープ』という便利アイテムがあつてだな」「あたしは子供か！？」

「それを使えば人の一人や一人黙らせるくらいなんてことないんだぞ」

「あんたは鬼畜よ！！」

「なんだ。構つてほしいのか？」

「ば、ばばばばば、ばばばあ！？」

「俺は男だ。どちらかと言えばじじいだ」

顔、真っ赤。俺じやなくてコイツが。

本当に一瞬で茹で上がるんだよな。血行がいいのかね。

やっぱ『コイツ』も紹介しなきゃダメ……ですよね。そうですよね。

ハイ、こちらが今回紹介いたします、『瞬間湯沸かし器』です。これが2つセットでお値段なんとハチキユッパ　あ、これもダメ？

では改めまして。

えー……。このハイテンションでときたまヘンタイちっくになる彼女（略して『ハイ・タイ』。田指せ流行語大賞！）こそ他でもない、我が校が誇る暴走少女『ひ

「にいに、会いたかつたあ

「おう妹よ、俺も会いたかつた！」

「今日ね今日ね、アニメートでお買い物なお。にいにも一緒に来てくれるう？」

「HA HA HA！ モチロンや」

やつべ。今日もみいたんマジ天使！

……と、俺の心のシャウトからもわかるとおり、このおつとつと

した口調のかわゆい娘が天使 もとい『みい』その人だ。

出来ることならいまからでも彼女の魅力を余すところなく語つてやりたいのだが、文字だけではその全てを伝えることはこりこりと欠けているので割愛。

……何？ 「他にも知りたいことがある」？

フフフ……。そんな諸君にすばらしく言葉を授けよう。

詳しく述べはWEBで。

それよりも、さつきからいつ……モヤモヤする。まるで、誰かの紹介を途中でぼつぼつしてきたかのよくな……。

「あああの、お、ねじゅまして、ます」

「ぬヲおお俺のうひに立つなあ！」

「ひううう！ 『じーじー』めんなさあい……」

「へー？ あ、いや違うんだ！ これは反射的にというかなんというかオフのふうとは知らなかつただけなんだだから泣かないで！」

「すん……ぐすん……」

「あー、泣かせちゃつた……。

。 。 。 。 。

そう簡単に話つて開けないよね、

うん。つか悟つてどうするよ、俺。

とうあえず言い訳をさせてもううどだね……俺、コイツ

『ふう』苦手なんだもん！

始終オドオドしてゐし、いまにも泣き出しそうな聲音で話すし、かと思つたら暴力に訴えるし…

この前なんて、出会い頭に背後からひじかけられて「動くな、吐け」だぜ。さすがの俺でもリバースしそうになつたね。……いや、あのときはオンのふうだつたか。

とにかく眼前の問題を処理しよう。

それにしたつてこのままじゃ埒が明かない。となれば……

「ひい、出番だあ」と叫ぼうと思つたんですが、何を探しておいでますか……？」

なんとも日本人として心配されそうな日本語になつたが、俺のテンパリ具合が伝われば良し。

「何つて……生命の神秘？」

なに言つちやつてんのこのハイ・タイ？

「もつといえはサングラスよ、サングラス」

なにやつちやつてんのこのハイ・タイ！？

「いますぐそのバッグから手を離して降伏しろ！」

「あ、見つけ」

「ちょっとひいさんそれだけは勘弁！」

我ながら見事な士下座。（行動が）速い、軽い、キレイ。キャー

れいクンステキー。

「むつふつふ。あたしを無視した挙げ句、放置プレイを強いた罰よ

誰だよコイツにそんな扱いしたヤツ。

「あ。俺か」

「ヘイみい、パース」

おおつと。ひい選手からグラサンが放たれた一ツ。

「パあス。はい、ふうちゃん」

そしてみい選手を経由してふう選手へ。良いパス回しです。

「ふえ……。あ、ありがとう」

「…………おや？」

実況という名の現実逃避を敢行しているうちに、なにやら不穏な空気が　つて！？

「待つて待つんだ待といじやないか！」

こんなときだが、説明しようツー。ふうはサングラスをかけると人が変わっちゃう一重人格ちゃんなのだツ！

ちなみに、俺が『オン』と呼んでるほうがグラサンかけた状態ね。
「あつという間にい、ふつちやん大変身～」
「な、なんだって！？」

もはやそれは、天使の声での死刑宣告だつた。

「むふつ。もう手遅れよ、れい」

「くッ！ ま、まだ何か手が」

「さあ

あ.....。

この女子高生らしからぬドスの効いた声。そしてそこそこいるだけで人を圧殺するかのようなオーラ。

間違えるわけがない。

「貴様の罪を数えろ」

「ア、 ッ！-！」

ふう様キタ

！！

ここの後、俺がチンピラ正拳突きを食らつた（SHHHT-!）のは、
また別の話。

もし俺の目の前に青いタヌキ型ロボットが現れたら、きっとタイ
ムマシンを借りて昔のふつを調教しに行くと思います、まる。

『作家になる』。

そんな思いつきで出たような話が、俺の夢だ。

ぶつちやけ少し前までは、夢なし部活なし彼女なしの3ナイ野郎
だつた俺の、单なる思いつきにすぎなかつた。

だが最近になつて、『3ナイ野郎』は『ナイナイ野郎』になつた。
それもこれも、あの3人に出会えたからこそだろつ。

まだあいつらには、言葉にして「ありがとう」を言えていない。

けれどいざれ言つべきときが来る。

だつたらそのときのために、俺はあいつらと過ごした時間を文字にして綴ろ。あとから読んでも笑えるよ、少しばかりコミカルに、小説風にして。

そしてそのときが来たら、「ありがと」と一緒にそれを贈ろう。

この物語はまだ始まつたばかり。

あいつらがヒロインで、俺は主人公兼作者。

これはそんな物語。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2203ba/>

まだ名前のない物語

2012年1月5日17時53分発行